

陽の里

発行 平成11年4月20日



社会福祉法人 新生会
総合ケアセンター

サンビレッジ

No.67

テーマ 人に学ぶ 施設実習レポートより



老人ホーム二日体験

池田町立池田中学校2年

岡崎 耕典

僕は、この老人ホーム一日体験でいろいろなことを学んだ。

まず、初めての体験だったのでちょっと緊張した。はじめの方は、しっかりと世話が出来るかなあと、ちゃんと話せるかなあと心配だったけど、実際にやってみて全ての人ではないけどほとんどの人と話すことができた。耳の遠い人とか言葉の聞き取りにくい人がいたけれど僕から話しかけることもできたし、向こうから話しかけてくれる人が多かったのにびっくりしたし、少し安心した。

中には、いつも歌を歌っている人や、テレビをじっと見ている人、眠っている人などいろんな人がいてとても楽しかった。

特に歌を歌っていた人は、僕にも歌を歌ってくれたのでとても嬉しかった。

次に、僕は車椅子に乗ったわけだけれど、普通に乘って前進したり、押してもらった経験は何度もあった。しかし、「足を曲げて乗ってみてください」と言われ、足を曲げて乗ってみると、足を車の足かけの所にかけている時よりも、幾分怖い感じがした。このことで僕は、足に力がなくなった人が車椅子に乗るととても恐ろしいんだなあと

思った。

あと、坂道などがあった時も方向を変え、後ろ向きにしてあげたり、登りの時は、押してあげないととても力のあることを実感できた。

この二つの体験で、まず、一番よい介護をするには、自分がまず、その障害者となり、その人達がどんな時に不便かを体で知ることだと思った。そのためいろいろと体験したこの一日はとても貴重であった。

最後に、一番心に残ったことは、食事を食べさせてあげることだった。

二人食べさせてあげたうちの一人は、途中で眠たくなってしまい、もういらないと言われたので困ってしまった。二人目の人は、僕が口に運んだ物をしっかり食べてくれたのだが、何も言わないので自分が食べさせているものと相手の食べたい物が違うのではないかととても心配になってしまった。でも、食べ終わった後に、介護の人が「良かったね」と言った時、うなずいてくれたことがとてもうれしかった。

僕は、この経験の中で自分の間違いに気付いた。それは、世話をしとてあげると言う考えでやっていると思わず失敗してしまふことがわかった。だから、世話をやらせてもらうという考えを持つのが、お世話をする時に一番大切だと思ふ。

ふれあいタイム

サンビレッジ国際医療福祉専門学校

総学科長 井口 明

ときどき卒業生が学校に訪ねてくる。職場での戸惑いや喜び、悩みなどを話してくれる。時に介護上の問題について意見を求められる。仕事に就いてまだ数カ月なのに、利用者のために自分のできることは何なのか、介護者としてどうしたら良いのかと真剣に考え、前向きに取り組んでいる。そんな姿はとも頼もしく輝いて見える。そして、卒業生は口々に、「この学校で一番好きだったことはふれあいタイムでした」と言う。

ふれあいタイムとは、第二の校舎であるサンビレッジ新生苑へ毎週2キロの道程を歩いて出かける。暑い日も寒い日も歩いている学生の姿は町の一つの風物詩になりつつある。徒歩は最初の頃、学生には不評であるが、次第に四季の移ろいを感じ、お年寄りへの話題を収集する時間にもなってくる。体力も忍耐力もついてくる。学生は見学から始まり、居室の掃除、身の回りのお世話、身体介護と進み、2年次には一人ずつお年寄りを担当させていただく。毎回一律の指示や目標は示さず、自分のペース

で自主的に学ぶこととしている。最初の頃は、挨拶もぎこちなく、会話の中身も乏しく、そうですがしか言えない学生もいた。お年寄りに、話にならないからあっちへ行きなさいと言われた学生もあった。しかし、お年寄りと接する回数が増えるにつれ、少しずつ理解を深め、もつと相手の事を知りたい、もつとコミュニケーションがとれるようになりたいと変わってくる。

また、職員の何げない声かけや態度から、信頼関係の大切さや接遇のありかたを学ぶことが多い。学生の感想の中に、以前は障害者や痴呆の人に偏見を持っていたが、何ら変わらない一人の人ということも分かった。授業で習ったことがすぐ確認でき、基本と応用の違いも理解できた。行くたびにお年寄りが好きになった等が多く見られる。



▲授業の一つふれあいタイム



更に社会人になって、改めてサンビレッジ新生苑の中に身を置いたことが、どんなに自分の体にさまざまなことを記憶させたかを実感しているようだ。多忙にもかかわらず、職員ゆつたりとした話し方や優しい目線、お年寄りの笑顔や歌声、犬や鳥の姿、四季を彩る花や植物……心地よい空間を演出することの大切さと大変さを今味わっているようだ。

時間をかけて身につけたことを、時間をかけて実践してほしいと願っている。

ボランティア研修に参加して

揖斐川町立揖斐川中学校教諭 勝野信翁

岐阜県教員の12年目研修の社会貢献体験研修で8月の2日間、サンビレッジでボランティア研修を受けさせていただきました。

私が配属された現場は、カトレア棟という所でした。その入所者の方はほとんどが寝たきりの方で施設の中では一番たいへんな所でした。はじめは、「自分だけたいへんな所でないやだな」と正直言っていました。

カトレア棟には約50名の方がみえましたが約半数の方は車椅子にも乗ることができませんでした。

1日目は午前中説明を受けたあと午後から配膳、食事介助、下膳、洗い物、おやつ水分補給介助をさせていただきました。食事介助はなかなか食べてもらえず、話も通じず、時には口も開けてもらえず、たいへん時間がかかり、介助の難しさを痛感しました。その後排泄介助でてきた大便小便の入ったバケツの山の洗い物をしました。しかしその時点でもまだ「人の汚

物进行处理するなんていやだな」という気持ちがありました。1日目の研修が終わって、他の棟で研修した教師仲間と話を見ると「ホールで一緒に歌を歌ってお話の相手になつている」と言い、羨ましく感じるとともに、「まだ2日目があるのか」と憂鬱に感じました。

2日目は朝から排泄介助、着替え、整容、整髪、配膳、食事介助、下膳、洗い物、おやつ水分補給介助をさせていただきました。排泄介助では体を支えておむつを交換しました。その時介護士の方が摘便をしました。大便が固くて出ないので肛門から指を差し込んで掻き出しました。「痛くして悪いねえ。もう少しだから」と声をかけながら。お年寄りの方は体を震わせながら耐えてみえました。その後丁寧に拭いて汚れを取る姿を見ていて私は自分が今まで嫌がっていたことが恥ずかしくなりました。そしてそうやって毎日働いてみえる介護士の方を心底すごい

と尊敬しました。その後99歳のおばあさんの着替えをしました。

1897年生まれの方の生きてこられた時代(日露戦争の頃、戦前、戦中、戦後)を思い浮かべながら、下着、シャツ、ズボン、靴下と身に付けさせてもらいました。おばあさんの足は痩せてカサカサでカチカチでした。どのおじいさん、おばあさんの足もそうでした。寝たきりの人は体がカチカチでした。整髪をするときも身体を抱えてだき起さないと髪をとけませんでしたが、しかしどの方の髪もとても美しい白髪でした。その後2日目の介助は何をさせてもらっても不思議といやという思いがありませんでした。介助しながら、福祉、健康、介護制度、そこで働いてみえる方々、人生、命について等いろいろ考えさせられました。大袈裟かも知れませんが、2日間の研修で人生観が変わったようにも思います。私にとっては本当に意義深い研修になりました。

OJT研修を終えて

サンビレッジ新学生苑

スズラン棟 責任者 桑原 陽

私は平成8年6月に中途採用された。本来ならば新人研修を受け一人役として業務に携わる訳であるが、私の場合、2級ヘルパー講習と現場実習で一人役となった。もともと畑違いからの転職のため介護について知識が有った訳でなく、経験だけに頼り理論に裏付けされた介護を行っているかという点において自信が無かった。

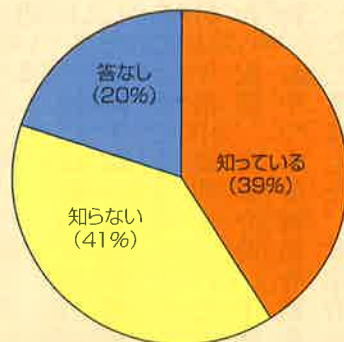
今年度よりOJT(中堅職員)研修が開催されることになり参加の機会が得られた。ここでは実践的な介護技術だけでなく、どうしてそうなるのか、そうしなければいけないのかという理論も詳しく学ぶことができ、また日々の小さな疑問も解決することにより自信を深めることができた。ある程度介護の現場で働いて来たからこそ理解を深められたことも多かったように思う。

この有意義な研修を元にこれからも利用者のQOL向上のために頑張りたい。



評価アンケート(4)

《ツナギ服(抑制服)を知っていますか》



当苑では、全職員がおむつの中で排泄する体験をします。そのことから、

- ①おむつの中で排泄する難しさ
- ②濡れたおむつの気持ち悪さ
- ③人に一番まかせたくない排泄介助を、まかせざるを得ない無念さが、少しだけ分ります。

その体験により、「ツナギ」は、「濡れたおむつもはずさせないという人権を無視した服」との認識に至り、一切着用しておりません。

おむつはずしや弄便という行為は、障害者側の問題でなく、排泄を援助する介護者側の問題として捉え、対応方法を個々に考えていきます。勿論、障害者の表情は生き生きとしてきます。

「ツナギなる衣類」

増田 武

私の妻は、平成八年三月、朝の着替え時から異常が起り、脳梗塞で入院を繰り返しました。諸検査、治療処置等を受け出血性脳梗塞、半身随症が固定したようで排尿の管が外れず付けたままで、十二月A病院を退院しました。

在宅ではA病院の訪問看護に排泄の処理方法を見習いましたが、当人が右手を自由に動かすため、便の処理に一番苦労しました。嫁と二人がかりでした。その折、嫁が雑誌広告で患者用の「ツナギ」なる衣類を見つけたが、早速二着注文購入し、着せましたが、排尿の管があり着替えも大変で三力所の「チャック」を一点に集め施設するのです。しないと本人が右手で外します。施設を苦にしながら夜中に目を覚ますと「鉄で切れ」と言い出し、ズボンをまくし上げたりして管が外れそうになることもしばしばでした。「ツナギ」の着替えや管を付けたままの移動等に私一人で到底できず、嫁が会社を辞めてくれ、介護が続けられました。

しかし平成九年三月、突然嫁が畑で倒れました。口がきけず涙を流すばかりで、すぐに救急車にて病院へ

走りました。嫁のことは里の一族や俵孫にまかせ、妻の薬を買って帰ってきた途端、我が家のこの地獄のような状態に、私は目の前が真っ暗になり、大声をあげて男泣きに泣きました。

早速、民生委員さんに老人保健施設の入所手続きをお願いして頂き、Sセンターへ妻を連れて走り、その晩は、食事、投薬等世話をし、卒の迎えを待ち、夜十時妻を残し帰宅、孫娘の世話で夕食を頂きまして安心と心配が交錯する中、床に就きました。Sセンターでの入所で有難かったことは、入所後一週間程で排尿の管が外されたことでした。衣類については「ツナギ」を更に一枚購入し、毎週金曜日の入浴の折、着替えたものを家で洗濯し、乾いたものを届けることを繰り返しました。車椅子生活も左足首を車体にしばられ、週一回程の面会の折、ベッドに降ろせとせがまれ心を痛めました。

私は兼ねてから斯く成る時は、特別養護老人ホームサンビレッジ新生苑の入苑を願っておりました。妻は平成九年六月、待望のサンビレッジに入苑が容認され、午後ひまわり広場に落ち着かせて頂きました。

当苑では、最初から「ツナギ」は着用せず、車椅子上では、むしろ外用のスタイルで日常生活が送られ、



夜間はパジャマ姿で寝ております。あく迄患者本人の意に添うのがモットーの介護方針だとのことですが、在宅看護の折に一番苦労していた排泄のことが心配でした。最初のうちは随分苦勞をおかけしたと思います。入苑後足掛け三年目になりました。今日では元の体に戻っていくようにさえ感じられます。体の状態で車椅子を取り替えて頂き、只今はウォーターチェアが体に良く合うらしく、顔色、言語等生き生きしており、ボケも進まぬように思われます。

訪苑の折、苑入口の碑に刻まれた文字を拝読する度に、故今村先生の御遺志が呼び掛けるのだと思えてなりません。嫁も回復しつつあります。これからも老体が持続できる限り一回でも多く面会に出かけたいと念じます。